

修士論文要旨

2011年1月

タイプC行動者が持つ心理的特徴の検討
ーレジリエンス、ユニークさ、性格特性を軸としてー

指導 中村延江教授

心理学研究科

臨床心理学専攻

209J4005

堀田 章悟

目次

問題	2
目的	2
方法	2
結果	2
結論	2
引用文献	3

- 【問題】** タイプ C 行動パターンと呼ばれる行動パターンがある。これは Temoshok によって提唱された、多くのがん患者に共通して見られる行動パターンのことであり、がん罹患のリスクファクターになるのではないかとまで言われているものである。タイプ C 行動パターンとは、怒りをはじめとしたネガティブな感情を表出せず、経験もしないということや忍耐強く控え目で、周囲の人々に対して協力的で、権威に対して従順であるというもの、他者の要求を満たすためには極端に自己犠牲的になり得るなどの特徴を示す行動パターンのことである。そのため、表面的にはいわゆる「良い人」に見えるのであるが、何らかの葛藤やストレスを抱えている可能性も考えられる。しかし、我が国においてはタイプ C 行動パターンそのものを対象とした研究は少なく、十分に検討されているとは言えない現状がある。
- 【目的】** タイプ C 行動を示す人々のレジリエンス、独自性欲求の型、性格特性特徴の 3 点について、タイプ B 行動を示す人々と比較検討し、その特徴を掴むこと。
- 【方法】** 私立 A 大学の学生（18 歳～24 歳まで）を対象に質問紙調査を行った。用いた質問紙は 1. SIRI-33 (Short Interpersonal Reactions Inventory (熊野ら、2000))、2. CTS (学生用 Coronary-prone Type Scale for Japanese (瀬戸・上里、1997))、3. S-H 式レジリエンス検査 (佐藤・祐宗、2009)、4. ユニークさ尺度 (宮下、1991)、5. モーズレイ性格検査 (MPI) の 5 種類とフェイスシートであった。これらの得点を必要に応じて χ 二乗検定と分散分析にかけ検討を行った。
- 【結果】** レジリエンスにおいて、タイプ C に判定される人々の中でも社会的同調性の高さが特徴である群（以下 C1 群とする）はタイプ B（以下 B 群とする）よりも有意に合計得点が低かった。また、タイプ C に判定される人々の中でも合理性及び反情緒性の高さが特徴である群（以下 C2 群とする）は C1 群よりも合計得点が有意に高かった。ユニークさ尺度の下位尺度である「自己を積極的に表出するか」において、C1 群は B 群よりも得点が有意に低かった。また、C2 群は B 群よりも得点が有意に低かった。モーズレイ性格検査の下位尺度である、外向性尺度においては、C1 群は B 群よりも得点が有意に低かった。C2 群も B 群よりも得点が有意に低かった。また、神経症性尺度の得点では、C1 群は B 群よりも得点が有意に高かった。また、C1 群は C2 群よりも得点が有意に高かった。
- 【結論】** タイプ C とタイプ B の間では、「自己を積極的に表出するか」の得点や外向性尺度の得点によって明確な差が見られた。しかし、タイプ C は 2 つの群に分けることができ、他の項目に関しては 2 群そろって B 群と有意な差を得ることができなかった。更に、タイプ C の中の 2 群において、C1 群の方が C2 群よりネガティブな機能を果たしている可能性が示唆された。今後は、先行研究においては数々の特徴をひとまとめにして研究されてきた「タイプ C 行動パターン」を特徴ごとに「タイプ C1」と「タイプ C2」のように分けて検討することで、臨床的にも有意義な示唆を得られることが予想される。

引用文献

- Eysenck, Hans J. 1985 Personality, cancer and cardiovascular disease: A causal analysis. *Personality and Individual Differences*. Vol.6(5) pp.535-556
- Everson, Susan A. Goldberg, Debbie E. Kaplan, George A. Cohen, Richard D. 1996 *Psychosomatic Medicine*. Vol.58(2) pp.113-121
- Friedman M, Rosenman RH 1959 Association of specific overt behavior pattern with blood and cardiovascular findings. *The Journal of the American Medical Association* 96 pp.1286-1296
- Kissen, D. & Eysenck, H. J. Personality in male lung cancer patients. *Journal of Psychosomatic Research*. 6(2) 1962 pp.123-127
- 小花和 Wright 尚子 2002 幼児期の心理的ストレスとレジリエンス
PSYCHOLOGICAL STRESS AND RESILIENCE IN PRESCHOOL CHILDREN 日本生理人類学会誌 第7巻 第1号 pp.25-32
- 熊野 宏昭・織井 優貴子・山内 祐一・瀬戸 正弘・上里 一郎・坂野 雄二・宗像 正徳・吉永 馨・佐々木 直・久保木 富房 2000 Short Interpersonal Reactions Inventory 日本語短縮版作成の試み(第2報) —33項目版への改訂— 心身医学 第40巻 第6号 p.447-454
- Lydia Temoshok, Henry Dreher 1992 THE TYPE C CONNECTION : The Behavioral Links to Cancer and Your Health
(L テモショック・H ドレイア 岩坂 彰・本郷豊子(訳) 1997 がん性格—タイプC症候群 創元社)
- 宮下一博 1991 大学生の独自性欲求の類型化に関する研究 教育心理学研究 第39巻 第2号 pp.214-218
- MPI研究会 1969 新・性格検査法 誠信書房
- 岡本浩一 1985 独自性欲求の個人差測定に関する基礎的研究 心理学研究 第56巻 pp.160-166
- Rutter, Michael 1987 Psychosocial resilience and protective mechanisms. *American Journal of Orthopsychiatry*. Vol, 57(3) pp.316-331
- 佐藤 琢志・祐宗 省三 2009 レジリエンス尺度の標準化の試み『S-H式レジリエンス検査(パート1)』の作成および信頼性・妥当性の検討 看護研究 第42巻 第1号 pp.45-52
- 瀬戸 正弘・上里 一郎 1997 学生用 Coronary-prone Type Scale for Japanese(CTS)の作成および日本的タイプA行動者の特性・状態不安に関する検討 ヒューマンサイエンスリサーチ VOL.6 pp.195-206
- Snyder, C.R., & Fromkin, H.L. 1980 Uniqueness : The human pursuit of difference. New York : Plenum Press. pp. 518-527
(一部抜粋)